

観光における基礎理論と実習の融合による町づくり —笠松町の町づくり—

浅野弘光, 吉水淑雄, 山中マーガレット, 辻 公子

文化創造学部文化創造学科文化創造学専攻

(2010年9月24日受理)

Revitalizing Towns through a Combination of Tourism Theories and Active Field Work — Focusing on Kasamatsu Town —

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

ASANO Hiromitsu, YOSHIMIZU Yoshio, YAMANAKA Margaret
and TSUJI Kimiko

(Received September 24, 2010)

要 旨

「町おこし」授業において「実習はあくまでも実習で終り」町をおこすところまで学生が関与する時間がない。この課題を解決しない限り、身についた授業とは言えない。ここに「インキュベーション理論と実習の融合による」町おこしがある。必要なことは、具体的な町おこしへの支援が企画・提案の形で町の人々に示せるかが学生の到達点である。

町おこしには、町に住む人々が学生の提案を理解し、提案を自分たち（町民）の政策として、主体的に受け止め、活動を始めるところまでいかなくてはならない。ここまでくるためには、企画・提案者としての人柄（町の人々と交わり、支援できる人間性）を育成することが必要である。言い換えれば「インキュベーション理論と実習の融合」は、観光のプロフェッショナルとなる人材を、提案力を土台として育てることである。

〈キーワード〉 基礎理論と実習の融合, インキュベーション, 視点分析法, 政策

I 立案が町の姿を変える

「町おこしの実習」をする場合、一般的には、まず現地を観察し、KJ法などを使って資料を収集し、カードを分類し、分析して課題をつかみ、「町おこし」の計画を立案すること

が多い。しかし、無制限に授業時間があるわけではないし、前期、後期にわたって「町おこし」の立案に時間をかけることもできない。本来ならば、町おこしに関する基礎理論をみっちり理解し、その上に1年間ないし2年間をかけて課題を追究する時間をもつこ

とが理想である。しかも、学生の町おこしの立案が町の姿を変える力を持ち、町の人々によって「見える化=確認化」されるかどうかが本来の町おこし実習の成果である。

指導者の側にあっても学生の立案が「紙の上の主張」であっては、授業の成果を成就感に結びつけることができない。まして、町側（役場・各種団体・NPOなど）と学生側が協力して何かを創り出し、町の人々が自立の気持ちをもって活動を始めるには、社会科学の基本的な調査方法であるKJ法から始めては、とても、学習の成果を実感することができない。これをどうにかして、「わたし達は、町おこしに参加し何か、町に残したのだ」というところまでもっていきたいのである。

1 空虚な提案

平成20年度に県都岐阜市柳ヶ瀬劇場通りの町おこしについて「フィールドワーク」(2年生)実習をしたことがある。15時間の内、5時間を柳ヶ瀬南地区のKJ法観察に当て、6時間をその分類と分析、残りの4時間をテーマの設定と街づくりへの提案に当てた。2年生の提案は、若々しいセンスに満ちた提案であったが、「町おこしに関する具体策（見える化）」に及ぶことがなかった。

その原因は、「町おこしに関する基礎理論」の欠落であった。端的な言葉で表現すれば、若者の感覚的思考は十分に働いたが、観光に関する概念的思考が弱く、提案書を読む人に「一般人では気が付かない新しさがある」という誉め言葉にはなったが、提案が提案で終るという空しさがあった。この苦い経験を踏まえ、観光理論から実習、そして、その一部の実現という繋がりを学生に実感させたいというのが本論である。

(1) 根羽村3年間の示唆

1) 教員がつくるベース

本論は「笠松町の町づくり」の「基礎理論と実習の融合」について述べていくが、その前提として、「基礎理論と実習の融合」を生み出してきた長野県下伊那郡根羽村での実践例を述べて「笠松町の町づくり」の予備知識にすることにした。

次の表は、平成19年度から21年度までの根羽村における学習内容と方法である。

表1 根羽村の「村づくり」に関する学習内容と方法の経過

	19年	20年	21年
①根羽の概要	○	○	○
②根羽の歴史	○	○	○
③根羽の地理	○	○	○
④インキュベーション		○	○
⑤観光ビジネス		○	○
⑥資源としての根羽		○	○
⑦地域の伝統			○
⑧KJ法	○	○	○
⑨視点分析法		○	○

これを見ても分かるように19年度までは⑤の観光ビジネス論と④の地域おこしに関するインキュベーション理論（この意味については後述）が欠落していることである。観光関係の実習が集中講義の形をとるため「実習地域の歴史・地理・風俗、実習地域に関する資料（写真を含む）」が優先され、実習地域における学生の感覚的思考（養老孟司著より）の誘発だけが大切にされてきた。

そのため学生にとっては新鮮で楽しい実習であったが、観光理論の発展としての提案になることは少なく、村おこしに対する具体的な提案に成り難い状態であった。

例えば、根羽村での19年度の提案は、『根羽杉の彫刻』また、『木の葉を集め、資本をかけないで夏スキー場をつくりたい』（要約）などの提案であった。これでは、一時的な面

白さがあっても村おこしのために「村が一つ」になって協力し合う体制には成りえないのである。

20年度から実際的な成果をあげ始めるが、それは2泊3日と7時間の中に、観光理論としての(1) インキュベーション理論, 2) 観光ビジネス論の基礎と、観察のための社会科学的方法である「視点分析法」(KJ法の発展)を取り入れたことにある。

学生の努力を提案まで持つていくには、教員自らが学習のためのベースというべき、事前の材料を提供することである。20年度は次のような視点を与えた。

「地域資源の活用では、木材以外の資源が活かされていない。人々は外部に働き場所を求め、村内資源を活かそうとする努力をしない。」これが追究の視点である。

学生たちは、上記の視点に立って「聞き取り、観察」を開始し、地産地資源の活用を「饅頭NEBA」と言う形でまとめ、試作品をつくり、販売に努めた。学生の企画・立案が学生の手で「見える化」という成果を揚げたことである。(しかし、費用対効果や村人の結集力の構築については手が届かなかった)この成果は、「学生は提案だけして帰ってしまう」という提案終結型から「学生の提案は村にとっての救済策になる」という提案実現型の実習に発展した。(後日談であるが一時間で250個の饅頭NEBAを他地域で売り上げた)

2) インキュベーション能力

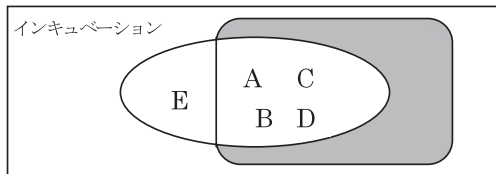
先に費用対効果と村人の結集力に未熟さ

があったと述べたが、「わたし達の企画・提案によって、村人や関係機関が動き、村が変わっていく」と言う実感こそが、観光専修の学生に自信をもたせ、観光ビジネスのプロフェッショナルに道筋をつけインキュベーション能力を開花させることである。

そのためには「村内に抱え込んで眠っている能力」を組織的に動かすことが必要である。

インキュベーションとはincubateという動詞からきている。直訳すれば「卵を抱き孵化させる」という意味であり、孵化させる要件を整える組織ということができる。根羽村の20年度の場合「饅頭NEBA」の企画・立案がされると、次のことが直ちに村で動き出した。

- ①饅頭NEBAのための地元産材料が、NPO 杉っ子餅によって集められ、役割が組織された
 - ②生産のための用具は、森林組合が協力した
 - ③生産のための資金は、根羽村が支援した
 - ④生産のための熟練した技術は、NPO 杉っ子餅が提供した
 - ⑤試作品の販売に、村人が協力した
 - ⑥試作品の味付けには、学生の新鮮な感覚が効果を出した
 - ⑦「ネバーランド、村営」で販売した
 - ⑧1時間で200個を根羽内で完売した
- インキュベートする能力が、学生の企画・立案で動き出したといってもよいであろう。先に「視点分析法」について触れたが、村の



- A 人的資源の活用 B 町内資源の再生
C 町民の考え出した政策の共有化
D 町民の自発的協力と努力
E 各種地域文化の発掘

人々が抱える課題を確実に捉え、具体策を学生が提供できるという村人への配慮こそ、インキュベーション能力を動かす基本だと考えている。学生側からみれば、学生の引き出そうとする村内能力が課題解決のためにどのように結集してくるかがインキュベーション能力となる。次にNHKをはじめ4社の報道機関が扱ったのは、村人のインキュベーション能力の発揮によって生み出された地産品の素晴らしさであった。

2 融合という考え方

理論が実習を通して企画立案に活かされるには、インキュベーション理論を地域おこしの能力として活用することであった。そのためには教員側で課題を絞り、その課題を観察視点として企画・立案することであった。この関係を理論と実習の融合と呼んだ。

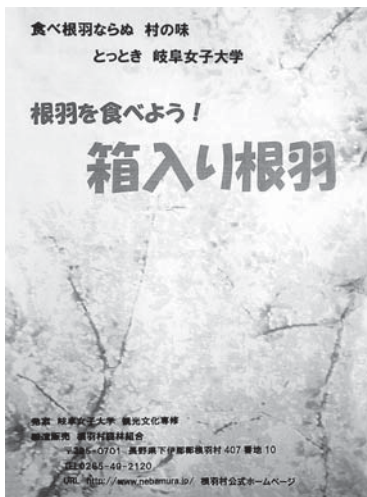


写真1 22年度の「箱入りNEBA弁当」

(見出し)

中日新聞「山の幸召し上がれ—地元食材で村内弁当作り」

信州日報「『箱入り根羽』を考案—中学生と協力して」

信濃毎日新聞「シカ肉の弁当メニューを検討」

南信州新聞「食べ根羽ならぬ村の味」地元食材を使った弁当提案

端的な言い方をすれば観光理論が実習の過程で働き出すというわけである。顕著な例は、次のようである。

- ①この提案が現実化するためには、どんな人の協力が必要か、資源は確かなものか
- ②資金の調達はいいか
- ③売れる可能性があるのか

このように、人を含めた村内資源の活用を結集していくことが融合の特色である。

この実践を基に20000人余の町で検証することにした。

II 笠松町の町おこし

Iで述べた根羽村の例は人口1200人である。そこで岐阜県羽島郡笠松町の人口20000人の町を対象に検証することにした。過去に笠松は、伊勢湾・桑名市に繋がる木曾川と木曾川湊をもち、美濃と尾張を結ぶ最大の交易拠点であり、問屋街であった。また、美濃地域を支配する代官所があり、明治維新には岐阜県庁が笠松に置かれたほどである。しかし、国鉄の開通で海上交通が衰え、岐阜市に繁華街、問屋街が移ると長良川との競争もあって、急激に衰えた。しかも、昭和40年代より陸上交通の発達で、都市の僻地とみなされることもあったが、大型店に対抗して伝統的な古い町を守り、昭和60年代までは、笠松の名を止めてきた。現在も「酒、醤油、菓子、魚屋、呉服屋」などが店を開き、最近では「町の駅」の一つとして伝統的な店が復活をめざしている。

町の中には、人的資源として「NPO元氣木曾川」「川の駅」「昔話を読み聞かせる会」「笠松町推進会議」「道徳の町笠松」委員会などの町を再復活させるエネルギー源が蓄積されており、人々の格式と誇りが継承されている。これらを箇条書きにすれば下記のように

ある。

- ①これらの人的資源が自ら立ち上がる機会をどのように人々の協力で仕組むか
- ②地域資源を如何に時代に合う製品に発展させるか
- ③伝統的に継承してきた文化的資源および自立意識をどのように町の活動として表に出させるか
- ④町の人々の活動を如何に組織化して協力の体制に作りかえるか

これらを行政が誘導して・組織するのではなく、蓄えられた人的、地域的資源を町民自身が掘り起こし、自らの力で町を立ち上げて行く方向にしたいと考えた。本学の「観光文化と学習」で扱う町おこしは、上の①～④を含んだもので「インキュベーション理論」に相当する「まとまった町笠松」「生み出す力を内在している人的資源豊かな町」にすることがインキュベーション理論の具現化である。

インキュベーション理論は、本学の観光フィールドワーク理論の基本である。その基礎は「笠松に居住する人々（構成員）がそれぞれ持つ（蓄積された町の集積能力）独特な（個性的な能力）能力を目的に向かって出し合い、共同で取り組み、社会共通の利益を生み出す可能性があるとき、その実現のためになされる笠松人の共通な努力と協力・活動の姿（人々が力を合わせて目的を孵化させる）」を指している。

1 イメージカラーと「オレンジ日和」

先に述べたようにKJ法の発展として視点分析法で抽出された課題は、次のようである。

- ①町全体の雰囲気の水（木曾川）と松（町の木）にこだわり、明るさがない
- ②大正・昭和の雰囲気と力をもっているが、

自ら町を活性化させる力動感が少ない。

- ③町を将来背負っていく若い人たちの中に、素晴らしい実力と技能をもった人たちがいるがその力をはき出す機会が少ない。菓子製造技術、川料理の専門家、染色の技術者、競馬の調教師、呉服生産の技能者、
- ④実力があっても働き口を町外に求める人が多い。
- ⑤岐阜県で一番先にできた工業高校はあるが、笠松で学ぶ人間として活動していない。

このような課題から討論を重ねキンキュベーション理論が成立する要因が笠松町に、どのように内在するかを探し、笠松町民が目的的に活動できる方向を見つけ、企画書として提案できる状況を創出すことであった。1の小見出しに示したように「目的的に活動できる方向」をイメージとして「オレンジ日和」とした。（町の人々の中には「2」で述べるように「タウンカラー」と「イメージカラー」を混同する人々もいた）

2 政策（提案）と「オレンジ日和」

「1」の①、②、③、④をどのように組織すれば「笠松人に内在する力」が、笠松共通の成果として発揮されるか（孵化するか）を、さまざまな関係者に意見を聞きながら、町民が生み出した「政策」になるように「オレンジ日和」を提案した。

政策と書いたが町民が「目的的に活動できる方向」と「社会共通の利益」を成果とする政策が学生の提案と比較的近いものになっていることが必要なのである。提案として町のイメージカラーを「オレンジ」とし、オレンジ色に包まれた町を「オレンジ日和」としたとき、視点分析法で導き出された町民の気持ちが「驚くほど前向き」に噴出し始めた。代表的な町民の発言は次のようである。

- ①わたし達の町は戦後木曾川の水色と笠松の松の緑を町のカラーとしてきた。今更オレンジに変更するのは難しい————でも、笠松の将来をイメージするならオレンジ
- ②今年の川祭りのカラーは水色だ。それを、なぜ、オレンジにしようとするのか————確かに水色は暗い感じがする。町民として明るく振る舞いたい。将来を夢見て町のイメージカラーがオレンジならば、誇りにできる。努力する色をオレンジとしたい。



写真2 杉山邸での会議

町おこしに関心のある人々が杉山邸に集り、学生の提案を町としての政策にするため、それぞれの立場から意見を述べた。この集まりをリードしたのは、「道徳の町づくり」を推進する事務局であった。

①、②のほかいろいろな意見が出され、それぞれの立場で討論を重ねた。中には、水と緑をタウンカラーに決めた頃の人もいて、「タウンカラーは変えがたい」「しかし、希望の町のイメージにオレンジはよい」という意見も出た。町の人々から湧き出る「オレンジ日和」への期待である。インキュベーション理論と実習によって生み出された学生の提案は、町の人々の理解と人々の前向きな気持ちによって**学生の提案から町民が作り出した政策**に発展した。

町民がつくり出した政策に発展すると、学生の提案は町の人々によって具体的に動き出した。

Ⅲ インキュベーション能力と実習の融合効果

1 笠松の新しい孵化の動き

現在、オレンジ日和の政策は（もはや学生の提案ではない）笠松内に内在する能力・個性によって、前進しつつある

- ・21年度の「パカパカ団子」は、商品化され、売り出された。
- ・そのときの推進役は、NPO元気きそがわであり、世話役は教育委員会である
- ・パカパカ団子の宣伝効果を高めるため、笠松競馬場が子馬のポニーを貸し出した
- ・染色組合と織物工場は、宣伝用の旗を製作して提供した
- ・役場は、その一部の資金を提供した
- ・町長は、自立する町民を応援するため「自立の素晴らしさを支援する」講演会を開催した
- ・菓子組合は、パカパカ団子生産の技術を提供した
- ・伝統的な醤油製造業者は、笠松の味がする醤油を提供した
- ・「道徳の町笠松委員会」は、ソーシャルキャピタルの立場から町民に協力と支援をお願いした。

ヒヨコを生み、鶏に向け町民の一部が走り出すと、他の内在する能力が動き出した。昭和初期からの商家は「町の駅」組合を使って新しい商品の開発に挑み出した。川の駅組合は、川祭りだけでなく、川から町への人の流れを考えるようになった。競馬に来る人を町へ導く方法も考え出した。もはや、学生の提案は、町の人々の企画として進んでいくよう



写真3 高島家の店先

江戸時代から続く「溜まり醤油」の高島家では、自前の醤油をパカパカ団子の「タレ」として提供すると共に、笠松の伝統的な店先を公開した。(伝統的な笠松の屋敷は、商家をたたみ、杉山邸のように公開していない)

になった。

2 オレンジ日和と個人・グループの実力が表出

インキュベーションの定義で「個人としての能力が共通の目的のために発揮される」という意味を紹介した。将来の笠松にオレンジ色を感じた人の中には、笠松の伝統的な行事「鮎鮎ウォーク」の祭りに参加して、自らの力を公開する人々も出てきた。

- ・ 紙紐を使った日本式建築模形の実演
(組みひもの伝統を継ぐ)
- ・ 木による仏像彫りの実演
(材木問屋の多かった頃の細工物)
- ・ 円空彫り実演
(材木問屋の多かった頃の細工物)
- ・ ちりめん小物づくりの実演
(江戸時代から続く織物地域としての伝統工芸)

道徳推進委員会では、声掛け運動を始めた。(教育委員会も支援) その最初が「鮎鮎ウォーク」であった。それは極めてきめ細かい運動になっていた。

もてなしの心 ようこそ笠松へ
ようこそ鮎街道のイベントへ
いたわりの心 お疲れ様でした。
おちゃでもいかがですか
お休みください
トイレはあちらです
励ましの心 あと少しです。
頑張ってください。

こうした「もてなしの心」「いたわりの心」「励ましの心」は、笠松の高齢者の積極的な世話によってなりたった。「こんな生き甲斐のある活動は他にない。笠松にいてよかった」という声さえ聞こえた。女性会議では、湯のみとお茶を提供した。まだ、最初の会であるが22年11月には「町のつどい」で、23年の2月には「町の売り出し」で行なうことになっている。

町の復活が学生の提案を動機として動き出したのである。

IV 自ら動き出す笠松

町民が生み出した政策は、一時的な熱に終るのであろうか。「I」で述べた根羽村の場合、インキュベーション能力が動き出すまでに6年の時間を要し、後半3年が「自らインキュベーターとしていく状況」になった。

しかし、20000の人口を抱える笠松町が、自分たちが生み出した政策と言いながら、根羽のように継続するとは考えられない。それは町内に存在する多用な考え方である。そのためには、学生の新しい感覚で更に町の人々を刺激し、町の人々の思いが孵化する状態にもっていかなくてはならない。それには、「笠松にあった、笠松でしかできない、根っこの深い地元の能力」を刺激しなくてはならない。

1 復活させたい信仰都市の復活 (23年度の

教師の願い)

町の信仰は、若者たちの中から消え去っている。しかし、神仏は確実にその形を残している。東京巢鴨の刺抜き地藏のように、地域の中心を形成する高岩寺(刺抜き地藏)は、心に悩みを持つ高齢者にとって欠かすことの出来ない文化資源である。

忘れられた高齢者用の衣類	笠松にもある
販売される草木の薬	同
懐かしい饅頭	同
瀬戸物専門店	同
穀物専門店	同
手作りの酒・醤油	同

すでに近くの町々から消え去った品物である。しかし、笠松では消え去らないで残っている。これを信仰と結びつけ、高齢者の憩いの街に出来ないものかと考えている。信仰群として、他のの町でめったに見ることが出来ない鬼母神がある。



写真4 八幡神社の鬼母神

例えば、岐阜県最初の県庁を抱えた笠松には天津神である「八幡神社」を東地域に祀った。一方で木曽川を中心とした経済の中心地笠松の西地域では、国津神である「産神」

を祀り、東の政治・行政の町、西に経済・商業の町として、信仰をベースとして栄えてきた。この小さい町に東本願寺、西本願寺そして数々の寺社を抱えつつ、手堅い、信仰のな町として残り続けてきた。

今日では、商業の衰え(岐阜市への移転など)新道・鉄道・幹線の移動、水運の衰えもあって、忘れられた町になったが、「道徳の町笠松」を町民憲章に掲げたのを機会に、改めて信仰の町を復活させたいと考えている。

V インキュベーション能力の育成による学生の成長

先にフィールドワークにおける調査時間の不足、学生による提案の軽さ、調査地域の人々の消極性などによって、学生の感覚と理論が活きて働くことが出来にくいと述べた。インキュベーション理論を適用し(5時間を当てる)10時間の実習、課外の6時間を当て、学生の自発的参加によるオレンジ日和の構築は、23年度の土台となる実践であり、根羽村を凌ぐ成果であった。しかし、インキュベーション理論と実習の融合が、どの村・町おこしにも有効なのかについては、今後の実践の積み重ねを待ちたい。

参考文献

- 1) 塩沢良典 町おこし、地域おこしと新しい政策概念 インターネット講座
- 2) 日本観光協会「数字で見る観光」2009年版創成社
- 3) 須田寛「新観光資源論」交通新聞社
- 4) 桐山秀樹「旅館再生」角川書店
- 5) 笠松町「道徳の町笠松委員会」笠松教育委員会